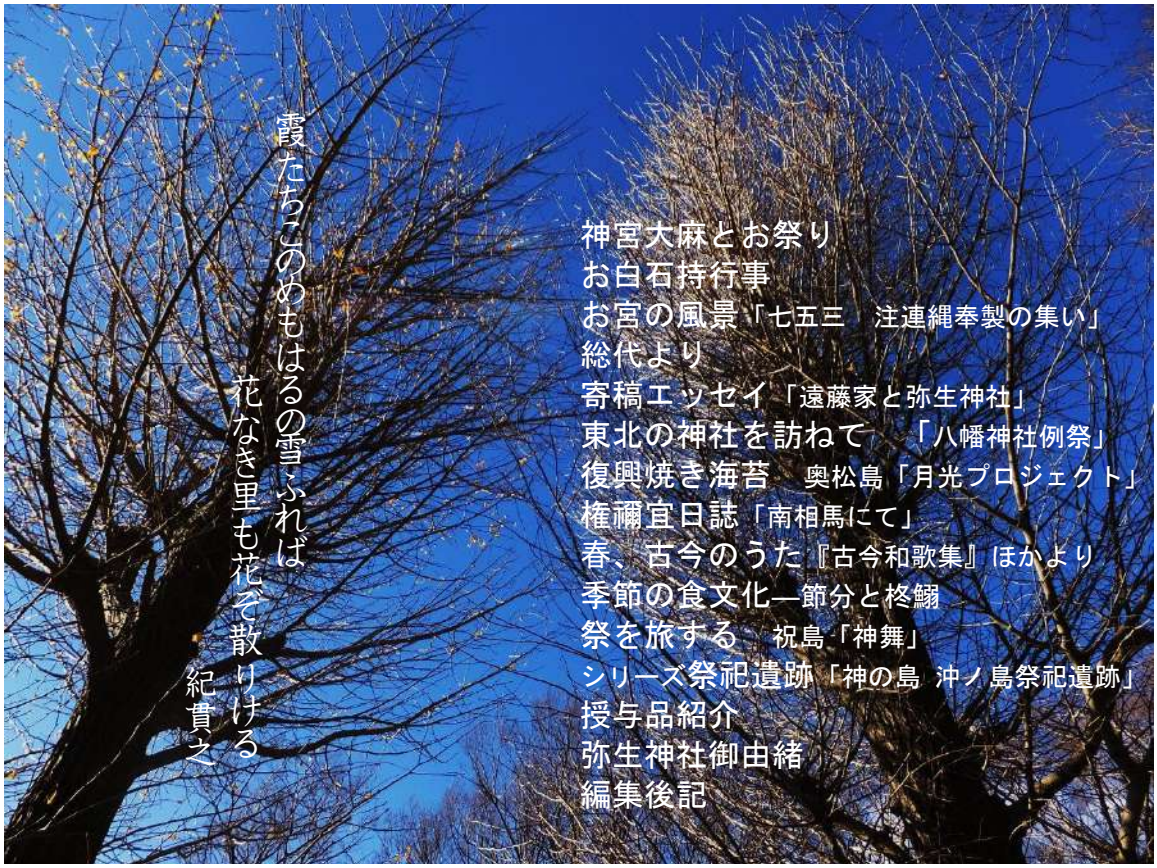
弥生

vol. 1



神宮大麻とお祭り
お白石持行事
お宮の風景「七五三　注連縄奉製の集い」
総代より
寄稿エッセイ「遠藤家と弥生神社」
東北の神社を訪ねて　「八幡神社例祭」
復興焼き海苔　奥松島「月光プロジェクト」
権禰宜日誌「南相馬にて」
春、古今のうた『古今和歌集』ほかより
季節の食文化―節分と柊鰯
祭を旅する　祝島「神舞」
シリーズ祭祀遺跡「神の島 沖ノ島祭祀遺跡」
授与品紹介
弥生神社御由緒
編集後記

早いもので、弥生神社宮司としてこの海老名に来て十年経ちました。当時は、境内の木々も伸び放題で光が入らず暗い雰囲気でした。お参りに来られる方もほとんどなく、毎日お掃除に明け暮れておりました。そのうちに犬のお散歩が始まり、少しずつお参りの方々もみえるようになりました。

行事らしき行事もありませんでしたので、氏子の方々とのふれあいの機会を作りたいといろいろ企画してみましたが、どれも今ひとつというところでしょう。

このたび社報を発行することになりました。神社からの一方的なお知らせではなく、多くの方々の意見や御感想をもとにして、読んでいただける紙面を皆様と共に作っていきたいと思っております。弥生神社に対する理解を深めていただければ幸いです。

さて、平成二十五年は神社界にとどまらず、日本の国にとって大切な二十年に一度の大事業、伊勢の神宮の遷宮が行われました。諸行事に、当社からもいろいろな方に御参加頂きました。

私は神宮の関係者から次のようなお話を伺いました。大神様をお移しするために古い御殿の御扉を開いたところ、それまで静かだったのに一瞬風が吹いたこと。それまでばかりか新しい御殿の扉を開き、お入り頂く時も同様であったと。また、二十年経った古い御殿でも、大神様が静まっておられるときは、堂々と光り輝いて見えたものですが、お移りになられた後は、古びた廃墟のように見えましたと。

御遷宮につきましては、皆様に御協力賜りまして有難うございました。お蔭様で諸事つつがなく斎行されております。

「氏神様でむすぶ人の輪　心の輪」

（宮司）

（第１号）平成26年１月　発行　弥生神社　046(231)2595/ email:yayoi-jinja@amber.plala.or.jp

新しいお神札で新しい一年を。

神宮大麻とお祭り

神宮大麻は、伊勢の神宮で奉製され、全国に頒布されるお神札です。奉製から皆さまに頒布されるまでにはいくつもの祭儀が繰り返されます。

神宮大麻と弥生神社のお神札

神宮大麻は伊勢の神宮にある奉製所で奉製されています。奉製員はまず潔斎をして身を清め、神宮を拝んでから奉製にとりかかります。その準備は、毎年一月中旬に始まり、暮れになると全国の氏神さまを通じて、皆さまのもとに頒布されます。

伊勢の神宮では、神宮大麻の奉製の過程で次のような祭儀が行われます。

大麻暦奉製始祭（一月上旬）
大麻用材伐始祭（四月中旬）
大麻暦奉製終了祭（十二月二十日）
大麻修祓式（毎週一回）
神宮大麻暦頒布始祭（九月十七日）

さらに、神宮大麻が届けられると、各都道府県の神社庁、各支部（弥生神社は相模中央支部です）、各神社においてそれぞれ「神宮大麻暦頒布始祭」がおこなわれます。

弥生神社での神宮大麻頒布始祭（25年12月1日）

神宮大麻は、天照大神の「みしるし」として神棚の中央におまつりします。昔から、日々の生活の中でその御神徳を仰ぎ、御恩に感謝する表象とされてきました。本年も弥生神社社務所にて頒布しております。毎年、新しい神宮大麻と氏神さまのお神札を受けて、新しく清々しい一年を迎えましょう。

＊祭儀…（さいぎ）神仏などを祭る儀式
＊潔斎（けっさい）…物忌み。斎戒。肉食や流血などの穢れに触れることを避けたり、禊をして身を清めること。
＊修祓…（しゅばつ）おはらい

【参考文献】 神社本庁発行『神宮大麻・暦についてのQ&A』『神宮大麻の歴史と意義』、國學院大学日本文化研究所編『神道辞典』

お神札のあるくらし
くらしの中で
神さまの恵みに感謝の祈りをささげましょう

神棚がなくても…
お札立てや家具に白い紙を敷いておまつりしましょう

伊勢の神宮では、平成二十五年十月に新宮に大御神さまが御移りになる遷御の儀が行われました。二十年に一度行われる「式年遷宮」は、平成十七年の「山口祭」に始まり、八年の間、約三十の祭儀と行事を積み重ねます。弥生神社では、平成十八、十九年の「お木曳行事」に参加。そして二十五年七月、内宮の「お白石持行事」に参加しました。この行事は、新宮が立つ御敷地に敷く白石を奉献する行事です。前日には二見興玉神社にて心身を清める浜参宮に参列。当日、小雨の降る中、おかげ横丁を出発し、宮川から集められた白石を載せた車を宇治橋まで曳きました。境内では白い布にひとつずつ白石を包み、新宮の御垣内に進み、御敷地に並べて参りました。

二見興玉神社での浜参宮

海老名より伊勢の地へ

お白石持行事

二十年に一度の行事に参加できると聞いたとき、こんな機会は二度とないかもしれない！と思い、すぐに飛びつきました。

お白石持は、最初何千人という人数で綱を引き進んでいきます。あまりに大勢なので自分がどの辺りにいるのかもわからず、なかなか実感もわかずにいましたが…先に進むと、一人に一つずつのお白石を渡されました。さすがに期待感と緊張感までわいてきてドキドキです。思っていたよりも大きな石を、両手でしっかりと持ち、御正殿へ向かいました。

この中には次の次（四十年後）の式年遷宮まで入れないと聞き感無量でした。そして、世界平和とまではいきませんが、多くの人の幸せを願いお白石を納めてきました。

伊勢神宮の今まで感じた事のないような独特の空気、荘厳な雰囲気、一つ一つの光景が今でもはっきりと心に焼き付いています。また二十年後も行けたらいいなあ。

中里ゆかり

＊お木曳行事…式年遷宮で用いられる檜の用材を、内宮、外宮の境内まで曳く行事。

—伊勢神宮参拝の旅—

平成 26 年 3 月 18 日～20 日

＊内宮・外宮参拝

＊古殿地拝観　諸施設見学

＊参加費 40,000 円程度

主催：神奈川県神社庁

詳細は弥生神社社務所へお問い合わせください。

黄色に輝く銀杏と菊の花咲く境内

秋晴れの大安、弥生神社にお参りしました。美しい銀杏や菊に迎えられて写真撮影した後、宮司さまに祝詞をあげていただきました。声が謡のように響いて素敵でした。実はその内容を聞き取れたのは、生まれて初めてでした。ここまで無事に育ったことを感謝し、これからの健やかな成長と家族の幸せを祈る言葉を聞きながら、喜びと感謝の気持ちでいっぱいになりました。子ども達の記憶にも残ったようで、しばらく「かしこみかしこみ～」とうたっていました。

野口聡子

秋　七五三詣

二十五年度もたくさんのお子様がお参りにいらっしゃいました。弥生神社では、心を込めてお子様の健やかなご成長をご祈願いたしました。新たにお休み処と写真撮影でご利用いただけるよう木製の縁台を設置しました。

今年もさらにたくさんのご家族にとって思い出深い日となりますよう、当社では様々なアイデアを出し合い、準備を進めております。

お子様の健やかな成長を氏神様に御祈願し感謝する大切な人生儀礼。昔から日本人が行ってきたご家庭での儀式、安産祈願、初宮詣、七五三といった神社での御祈願―について、弥生神社では冊子『お子様の人生儀礼』をお配りしています。社務所にお声掛けください。

藁の香りに包まれて

初冬　注連縄（しめなわ）奉製の集い

十二月八日、社殿にお飾りする注連縄を氏子総代の皆さん、地域の方々と賑やかに奉製しました。自然の恵みを生かした古来から伝わる技術を伝承し、皆で学んでいく行事であり、新年を迎える大切な準備です。作業後には恒例のおでんを美味しく頂き、親睦を深めました。

毎年師走の第一日曜日に開催致します。見学だけでも構いませんので、お気軽にご参加ください。掲示板、オンラインでお知らせ致します。

総代さんより

神社をめぐる出会い　地域の活性へむけて

嶋貫勝造

私は、弥生神社総代の委嘱を、池田宮司より平成十六年に賜り、その間九年、宮司、総代会長、総代の方々、氏子の皆様等々、多数の方々に御指導を受けながら、神社諸行事の準備などに当たらせて頂きました。

今日までの神社への貢献と成果は？と問われると自信をもって返答できる項目はありません。しかし、私事ではありますが、神社についての知識が疎い中で、総代の委嘱を賜ったお蔭で、前に述べた方々との出会いがあり、御指導を賜ることができ、御相談も気軽にすることができました。このことが私にとってなんにも替え難く、尊い一番の成果と申し上げたいと思います。紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

さて、弥生神社は四カ村に鎮座していた神社の合祀により創建され、崇敬者の多い由緒ある神社として、地域の守り神として愛され、親しまれています。

現在、地域の方々、崇敬者の方々が気軽に参拝に来ていただけるよう、池田宮司御指導のもと、総代全員頑張っております。

神社諸行事についても、今まで以上に、氏子の皆様方と総代とが一緒に協力し合える状況を作り、諸行事、諸活動が充実して少しでも海老名市の発展、地域の活性につながれば、こんな幸せはありません。今後とも、御指導よろしくお願い致します。

弥生神社では、23名の総代の皆さんに支えられています。毎号、お仕事の内容や神社との関わりなど紹介していただきます。文章から総代さん一人一人のお人柄や神社への思いをお伝えできることでしょう。

社務猫ちょろ（母）＆きーこ（娘）

寄稿エッセイ

遠藤家と弥生神社

「いわゆる三三九度の杯や巫舞もありませんが、結婚奉告祭ならできます。心を込めて執り行いますよ。」と池田清宮司のお言葉。私たち夫婦は派手な挙式に苦手意識もあり、教会式も何かがちがう、と、入籍後の結婚式をどうしようか考えていた。弥生神社での結婚奉告祭は、我々に丁度良い。

早速お願いをし、親族と友人に声を掛け、拝殿に集った。十一月は七五三の時期で、皆さん忙しかったであろうに、丁寧に対応して下さった。宮司の祝詞が響く拝殿の中は厳かで、そしてまもなく温かな祝福と喜びに包まれた。記念写真の中の私は満足気だった。

その後、ストレスフルな職場にいたものの、一年後には息子を出産することができた（子授け守りのおかげ？）。

こんなふうに、結婚奉告祭によって、私たち家族が生まれ、弥生神社と繋がった。初詣に厄払い、お宮参り、七五三、神社は家族の歴史に彩りを与えてくれる。これからも、お世話になります。今年の十一月も、菊がとても綺麗でした。

遠藤由美子

東北の神社にて。

本吉町　八幡神社例祭

九日二十九日、
気仙沼市本吉町小泉地区にて
八幡神社の例祭が斎行されました。

本殿より小泉地区を見渡しながら神輿が下る。震災前は住宅地だった。

本殿より３基の神輿出御。担ぎ手は地元の若い方やボランティアさん。

宮城県気仙沼市本吉町小泉地区は東日本大震災の津波によって、住宅のほとんどが流されました。震災後、いち早く高台移転の合意がなされ、現在は移転先の整地が行われています。

小泉地区に鎮座する八幡神社の歴史は古く、田束山の修験道者が神官となって以来、山内義夫現宮司の先祖が代々、神官として神社を守られています。しかし、津波により八幡神社の里宮とともに、宮司さまの自宅、祭儀具等々すべてが流され、高台にあった本殿だけが残りました。そのような甚大な被害にもかかわらず、震災後も氏子総代さん、地元の方々の尽力と、全国からの祭儀具等の物的支援や神輿の担ぎ手のボランティアなどによって、秋の例祭を継続して斎行しています。

震災以前は、「神輿と共に地区の皆さんの住居をお祓いしてまわりました」と、建物の基礎だけ残った宅地の跡を、神輿と共に歩きながら宮司さんがおっしゃっていました。今年は、何本もの幟や獅子、太鼓、神輿の飾りなどが寄贈され、昨年より華やかさを増していました。震災以前に行われていた演芸会も、小泉中学校の敷地で特別ステージを設置。地元の皆さんの協力で復活しました。そして神輿渡御では、地元小泉中学校の三年生が手作りの神輿をかついで参加。大漁旗で作ったはっぴも華やかで、中学校までの道のりを彩っていました。太鼓の音と子どもたちの声で、昨年より賑やかな神輿渡御となりました。

また、地区を流れる小泉川は鮭の養殖がさかんで、津波で養殖場が被害を受けた後も夏には稚魚を流せるようにと尽力され、今年も無事に放流をしました。新設の養殖場見学の折には、現場の方々の仕事への誇りや地元漁業を担う責任感の強さを感じました。例祭当日には、小泉川沿いで、鮭が良く育ちますようにと祈る恒例の神事があり、川の水と立派に育った鮭をお供えしていました。

「震災後、全国から様々な方が支援してくださり、御縁ができたことが嬉しい」「少しずつものがそろい多くの人が関わるようになり、新しい祭りの形ができていけばいい」と、地元の方々もおっしゃっていました。毎年一歩ずつ前に進んでいこうという宮司さんや総代さんのお気持ち、それと呼応するような地元の方々の熱意が伝わってくるお祭りでした。

手づくりの神輿とはっぴで参加した中学生。大漁旗が鮮やかに映える。

小泉川沿いでの神事。鮭養殖業の方々が参列。

御縁あって八幡神社さんの例祭に前年に引き続いて参列させていただきました。

奥松島月浜
月光プロジェクト

復興焼き海苔

弥生神社では、宮城県奥松島月浜産の焼き海苔を、撤下神饌（*てっかしんせん）として頒布しております。

*奥松島月浜は東日本大震災の津波により甚大な被害を受けました。震災前は海苔養殖業のほか、観光業もさかんで、民宿、遊覧船、潮干狩り、ウォーキングによる展望台巡り、シーカヤックなどさまざまな観光業を展開していました。しかし津波により、漁場、海苔養殖施設、民宿ともに流され、震災直後は事業再建について全く先の見えない状況だったといいます。

そんな中、月浜の海苔養殖業者の方々が生産再開に向け、共同生産グループ「月光」を立ち上げました。以来、海苔生産の様子や現状をオンラインで積極的に発信し、オーナー制度も開始しました。

弥生神社では、平成二十四年より仙台市の大崎神社さんの仲立ちにより、月浜の「復興焼き海苔」を撤下神饌として頒布しています。東北の海の恵みを神様にお供えし、共に美味しく頂くことで、私たちの復興への願いが届きますようにと考えております。

現在、月浜は高台移転への協議を重ねており、漁業体験、民宿、海水浴場なども再開。美しい海に賑わいが戻ってきています。より活気ある月浜になりますよう祈りながら今後も応援していきたいと思います。

*奥松島…日本三景「松島」のうち、東松島市内でも沿岸部、特に宮戸島を突端とした半島付近。

*撤下神饌（てっかしんせん）…神様に捧げる食べ物（神饌）を下げたもの。

「月光プロジェクト」では、海苔の直販をしています。ご注文方法や「月光海苔」ラインナップ、ほか詳細はホームページをご覧ください。
http://www.gekkoh7.jp/

平成25年2月、月浜の海苔生産施設を訪ねました。美味しい海苔ができるまでを見学。そして美しい自然に感激しました。ぜひ皆さんも月浜観光へ！

「月光」の海苔生産施設のようす。

権禰宜日誌

「南相馬にて」

十一月一日、福島県南相馬市にいた。宗教宗派を超えて活動する「宗教者災害支援連絡会」の皆さんと小高地区、同慶寺の清掃のお手伝いをするためだった。

前日は、カトリック東京ボランティアセンターが運営する南相馬市の「カリタス原町ベース」で宿泊のお世話になった。同部屋は大槌町のカリタスベースで奮闘している同世代の方で、震災のこと、被災地での経験、互いの事を語り合い、意気投合した。宿舎でお世話になったシスターの柔和な笑顔と親切な応対は自然と心に沁みて、神様にお仕えする者どうしですね」とのお言葉に恐縮してしまった。

翌朝、カトリック原町教会でのミサに参列。オルガンの音色とともに歌う讃美歌と、神父さまのお言葉。震災の被害者の方々への鎮魂、復興への祈りが込められていた。初めての経験によるものめずらしさ以上に、親近感と共感を覚えた。

朝食後に向かった同慶寺。避難指示解除準備区域となり、日中の立ち入り許可がおりて以来、毎月一日と十五日に檀家さんが集まり清掃（結い）を行っている。活動前にまず、皆で「般若心経」を唱え、復興への祈りを捧げた。困難な状況下で寺を守る田中住職の淡々とした、まっすぐな姿勢と、震災前からの檀家さんとの絆を守る努力、僧侶として歩んできた道のり―、自らを省みずにはいられなかった。

本堂の清掃や境内の掃き掃除、草むしり。檀家さんたちと汗を流し、桜の植樹をして記念撮影。そして境内を眺めながらお茶の時間。穏やかな日差しのもと、檀家さんも笑顔で楽しげだった。世間話から寺の歴史、震災前後の生活のこと―、お話は尽きなかった。心の奥に複雑な思いを抱えてらっしゃるだろう皆さんと、心地良く楽しい時間が共有できたことが嬉しかった。

檀家さんの笑顔と共に、温かく受け入れてくださった宗教者の方々の深い信仰心によるぶれない姿勢、それゆえの他者への寛容さ、優しさ、敬意―が心に残った。今回実感したのは、考え方や信条が異なろうとも、同じ気持ちや願いによって、縁が繋がり、新たな力や貴重な場が創出されるということ。相手との違いを理解し認め合う、違和感を親密さに変えていく努力をしていきたいと思う。

そして、地元の方々に御案内いただき南相馬から浪江町、鹿島区へ。駅、町、港、目にする現実と住民の方々の悲しみが→重く身に迫った。一方で、ずっしりとたたずむ大悲山の石仏には心が静まり、仏のもつ悠久の力のようなものを感じた。全国から多くの子供さんが植樹に参加したという鹿島区の森の防潮堤では、苗木が風に揺れ西日で葉が眩しくて、温かな未来を思った。夕刻、津波で流されてしまった跡地に新たに祠と鳥居が立った山田神社で手を合わせた。忘れがたい滞在となり、南相馬でお世話になった皆様、同行の先生方への感謝の気持ちでいっぱいになった。

（権禰宜）

季節の食文化

節分と鰯

「柊鰯」のこと

節分にイワシの頭をヒイラギに挿して戸口にかかげて魔よけとする風習は広く行われている。このほか大晦日などの歳の替わり目や流行病が流行ったときにも同じことをする。これらは、ヒイラギの葉のとげやイワシの悪臭で邪霊や疫病を防ごうとしたものであり、古く《土佐日記》元日の条にナヨシの頭とヒイラギをつけた家々のしめ縄のことが出てくる。（『平凡社大百科事典』ヒイラギの項より）　（小河）

鰯のイタリアン巻き

材料
イワシ…開いて２枚に
ミニトマト…半分に切る
高野豆腐…戻して一口サイズに切る
エリンギ…スライスに
チーズ…適量
オリーブオイル…小さじ１
白ワイン…大さじ１
ニンニク…1かけ
塩…少々

作り方
①イワシに高野豆腐、エリンギ、チーズ、ミニトマトの順で重ね、イワシで巻いて楊枝を刺し固定する。
②フライパンにオリーブオイル、ニンニクを入れ、熱したら①を入れる。
③白ワインを入れたらフタをして、火が通ったら塩をふりかけ、できあがり。

家族の 節分レシピ

原あずさ（主婦）

恵方巻き

巻き寿司を切らずに１本丸ごと食べる、これは「縁を切らない」という意味。また七福神にちなんで、かんぴょう・きゅうり・伊達巻き・穴子（うなぎ）など７種類の具を入れます。これは「福を巻き込む」という意味を込めています。

ひとくち栄養メモ！

牛や豚などの動物は人間より体温が高く、川に住む魚は人間よりも体温が低いですね。人間より体温が高い動物の脂が体内に入ると、脂は固まってしまいます。逆に、人間より体温が低い魚の脂は体内に入っても固まらないのです。体内に入っても固まらない魚の脂は、血液サラサラにひと役かっているのです。

本を読む。

今回は“食べること”について知見の深まる図書を集めてみました。食品加工・流通の発展により、いつでも好きなものが食べられる現在だからこそ、“食べること”と歴史・伝統、風土のつながりを見直すことが毎日の食卓の豊かさを担保するように思われます。掲載した五冊はいずれも海老名市立図書館に所蔵があります！

小河洋友
（東京都内図書館勤務）

かながわのおかず
郷土の食材と料理

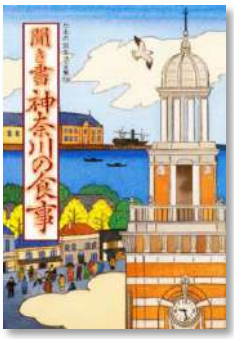
生活情報センター編集部／編　東京：生活情報センター

「神奈川県では“地産地消”を重点施策とし、農林水産業の振興を図っています。本書では県内でとれる旬の食材を使ったおかずレシピ 192 点を紹介。地元農林水産業の多彩さ、豊かさを感じることのできる一冊です。行事食カレンダー、朝市情報も併せて掲載。」

イラスト版行事食・歳事食
子どもとマスターする
特別な日の料理

坂本廣子／著
東京：合同出版
2007 年 06 月

「食生活、家庭環境の変化に伴い、行事・歳時食の意義をこどもに伝えていくことが難しくなった昨今。本書では「行事」と「食」のつながりを、料理レシピつきで紹介しています。行事・歳時食の意義を家族で楽しく理解することができます。」



聞き書　神奈川の食事
日本の食生活全集　14

「日本の食生活全集 神奈川」編集委員会／編
東京：農山漁村文化協会
1992 年 07 月

「全国 300 地点、5000 人の話者から「聞き書き」してできあがった世界最大の食文化データベース神奈川編です。三浦半島の食、相模原台地の食など、今まさに記録しなければ失われてしまう伝統的食文化を知ることができます。」

日本の食はどう変わってきたか
神の食事から魚肉ソーセージまで

原田信男／著
東京：角川学芸出版
2013 年 04 月

「生活文化史学者の著者が、国家との関わりから食の変遷を読み解きます。食の原型、神に捧げる神饌料理、料理技術に革命をもたらした精進料理、肉食を促進した明治の戦争・軍隊食、戦後の魚肉ソーセージ出現の理由…。独特な日本の食文化転換史です。」

かながわ定食紀行

今柊二／著
横浜：神奈川新聞社
2008 年 10 月

「神奈川県内約 50 の町で出合った美味しいお店、地元の人々が足繁く通う街角の食堂を紹介しています。2006 年から神奈川新聞に連載された 50 回分を一冊にまとめたもの。続編として『もう一杯！』と『おかわり！』も刊行されています。現在は閉店しているところもあるようなのでご注意を。」

祭を旅する

山口県　上関町祝島「神舞」①

周防灘に浮かぶ祝島は周囲十二キロほどの島。柳井港から連絡船で六十五分。一年を通して温暖でビワやミカンの産地として知られ、海岸は岩礁が多くタイ、ヒラメ、アコウなど魚の宝庫である。ここ祝島で四年に一度行われる「神舞（かんまい）」。祭りの準備は前年から始まり、島民総出で立派な仮神殿を立て、切り飾りで神殿を飾る。当日は大分県国東半島の伊美別宮社から神職と里楽師を船で迎え、五日間、神恩感謝の神事と神楽の奉納が行われる。その間、島は多くの観光客や故郷の島に戻り、祭りに参加する人たちで賑わう。

祝島から姫島を経由して国東半島へ至る航路は先史、古代における最短コース。西下するときの最後の中継地で万葉集にも歌われている。国東半島の伊美と祝島との縁は遥か昔にさかのぼる。伝承では仁和二年（八六六）、豊後国伊美郷の人たちが領主の命を受け、山城国の石清水八幡宮の神様を奉じて帰国の途中嵐に会い、祝島三浦湾に漂着。島には三軒の民家があり、島民は貧しい生活であったが彼らを心からもてなした。一行はその礼として神霊を祀ることを教え、護国の種（麦）を贈った。島民はそれを機に荒神（大歳の神）を祀り農耕を始めたところ生活は豊かになった。以来、島民は「お種戻し」として毎年八月に欠かさず豊後国伊美別宮社に初穂を供え参拝してきた。

神舞行事は何度も中断を挟みながらそのたびごとに島民が奮闘し復活させ、伝統を引き継いできた。そして平成二十四年も島民総出で盛大に斎行された。（続）

家人は帰りを早来と祝島　斎ひ待つらむ旅行く我を
草枕　旅行く人を祝島　幾代経るまで　斎ひ来にせむ
遣新羅使人『万葉集　巻十五』

【参考】祝島神舞奉賛会監修『祝島　神舞　２０００』**山口県文化財愛護協会発行『周防祝島の神舞行事』（昭和五十三）**

日本各地に伝わる祭。その土地の神様と自然と人々とが織りなす祈りの世界―。現在まで連綿と続いてきた地域文化を見渡せば、きっと尊いものがみつかるはず!? 毎号、リポートを掲載します。

平成22年、初めて祝島へ。神舞奉賛会の会長さん、国東半島の伊美別宮社の宮司様にお話を伺い、神舞の伝統と島の人たちの祭りにかける思いに触れました。そして24年、いよいよ神舞の本番！カメラ片手に防波堤の上へ！…そのようすやエピソードをお伝えします。（権）

春、古今のうた

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける　紀貫之『古今和歌集』第一春歌上

「霞が立ち、木の芽がふくらむ春の雪が降っているので、花など咲いていない里なのに花が散っているように見えることよ。」

＊木の芽が萌えているのは実際の光景ではなく、さらに「花なき里」は花が咲かない里であるとし、心の中の春に胸を躍らせているという解釈もある。

＊このめもはるの「はる」に「（木の芽が）張る」と春を掛けている。

【参考】『古今和歌集』佐伯梅友考注（岩波書店）片桐洋一『古今和歌集全評釈　上』講談社（平成十年）

折れ芦の鴨の入り江に陽はさしてゆきてかえらぬものに春くる　馬場あき子『桜花伝承』（昭和五十二）

くさも樹もなべてが天へたれさがるこの倒錯を春という　村木道彦『天唇』（昭和四十九）

懐かしき手紙展げるやうに海、春は小波の一小節より　小黒世茂『猿女』（平成十七）

先人の祈りの跡をたどって

シリーズ　祭祀遺跡

第一回

神の宿る島～沖ノ島祭祀遺跡～

福岡県宗像市、玄界灘の洋上に浮かぶ「沖ノ島」は、北部九州と朝鮮半島を結ぶ直線のほぼ中央に位置し、古くから「神の宿る島」として人々から崇敬されるとともに、四世紀から十世紀にかけて、東アジア諸国との対外交渉に際し、航海の安全祈願と国家鎮護の国家的祭祀が執り行われた島として知られている。

昭和二十九年より、昭和四十六年にかけて行われた三度の発掘調査では、島の中腹にある巨石の岩上や岩陰で二十三ヶ所の斎場が発見され、金製指輪や金銅製馬具、ペルシャ製のカットグラス碗や唐三彩など約八万点の奉献品が出土し、すべて国宝、重要文化財に指定されている。

現在、沖ノ島には、宗像大社の三宮のひとつ沖津宮が鎮座し、そこには、田心姫神が祀られ、島全体が宗像大社の神領とされるとともに、御神体島として、皇室と国家安泰の祈りが捧げられている。

また、「女人禁制」、「上陸の際の禊」、「島で見聞したことを他言しない」、「島の物を持ち出さない」などの禁忌が守られ、わが国固有の神祇信仰における崇拝形態の変遷を確認できる貴重な遺産とされている。

鳥越道臣（考古学）

【参考文献】『宗像沖ノ島』第三次沖ノ島学術調査隊編、宗像大社復興期成会、昭和五十四年三月

宗像神社
福岡県宗像郡玄海町田島2311
0940-62-1311　（沖津宮）
【祭神】田心姫神（沖津宮）、湍津（たぎつ）姫神（中津宮）、市杵（いちき）島姫神（辺津宮）
【例祭】十月一～三日
（秋季大祭（放生会・みあれ祭））

「神宝館」…古代から続く宗像三女神への信仰と奉斎してきた宗像一族の歴史を物語る宝物を展示。古代、神体島 沖ノ島で行われた大和政権による祭祀で奉献された約八万点におよぶ国宝の神宝類。また、宗像一族ゆかりの中世文書や阿弥陀経石、石造狛犬などの重要文化財が観覧できる。

「祭祀遺跡」とは…神々を祀る宗教行事に関係した遺跡です。山岳の神・峠の神・河川の神・岩石の神・森林の神・海洋の神を祀るなどその形態はさまざま。神道と深く結びつく我々の祖先の祈りの跡を毎号シリーズで辿ります。「海の宗像・山の男体」ということで次回は「男体山祭祀遺跡」を予定しています。

授与品紹介

社務所にてこのほか様々な授与品を頒布しております。

弥生守り

*2色ございます

厄除守り

安産守り

縁結び守り

交通安全守り

学業守り

健康守り

当社では神職が心を込めてオリジナルのお守り袋をデザインしております。毎号で紹介させていただきます

弥生神社御由緒

明治四十二年三月国分に鎮座の八幡社、上今泉の比良神社、柏ケ谷の第六天社、望地の大綱神社を合祀して創建された。

神社の称号については、御遷座が弥生の季節であり、万物全てが天地の恩恵を受け、栄え行く時であるから氏子一同これにあやかり、弥栄え行くようにとの祈りを込めて、弥生神社と定めた。なお新宮地は、風光明媚な大松原の現在地を最適地として定めた。

御祭神

誉田別命（ほむたわけのみこと）
猿田彦命（さるたひこのみこと）
高産霊命（たかみむすびのみこと）
日本武男（やまとたけるのみこと）

編集後記

多くの方々を巻き込み発行に至りました。突然の原稿依頼、催促…。感謝でいっぱいです。地域の一神社としてその役割や形を模索する中、弥生神社もオンラインでFaceBookやTwitterでの発信も始め、モのリニューアルも進行中（…汗）。そんななかあえて紙媒体で、なるべく（低予算で）手作りで情報と思いを丁寧につめこんだ社報を、参拝された方々に御挨拶としてお贈りし新年をタートしたいと考えました。

そして東北のこと。気仙沼までのコンビニおにぎりを補給しながらの長～い道中（宮司単独運転）…その先で出会った心揺さぶられるできごと。東北の方々の息遣いやぬくもり、御縁のもつ大きな可能性、などなどお伝えしたかった。そして、三陸の海はほんとうに美しいです。

次号の構成も思案中。神社、神道に親しみを持っていただきますように。皆さんが参加できる行事をどんどん御案内できる紙面になりますように、励みます。また、地元海老名のことを記録し共有したく、寄稿をお願い致します。海老名の昔話など大歓迎です。そのほか御意見もお寄せください。地域の皆様とつくりあげていく弥生神社&社報を目指します。

本年もよろしくお願い申し上げます。良き年になりますように。

（権）

編集・発行　弥生神社
海老名市国分北
二-十三-十三